

①題名

スポーツ雑誌の歴史社会学——ベースボール・マガジン社のメディア史

②全体要旨

本論文は、ベースボール・マガジン社の雑誌史を整理しながら、なぜ、人々はスポーツを「見る」「する」だけでは飽き足らず、雑誌を通して「スポーツを読む」という行為を選び取っていたのか、雑誌の誌面はそれとの関わりで、どのように変容したのかについて検討している。

ベースボール・マガジン社は、戦後初期から今日に至るまで様々な専門誌を刊行し、人々に広く読まれていた雑誌出版社（1950年代後半の野球雑誌は50万部も発行）である。同社の存在は、戦後のスポーツ出版・スポーツ文化を考えるうえできわめて重要な存在である。だが、論壇誌や大衆雑誌などに関心を置くメディア史研究では、これらの雑誌が考察の対象となることはなかった。スポーツ社会学でもメディアを扱う領域は存在するが、そこでは、テレビや新聞といったマス・メディア上でのスポーツ表象は多く扱われるものの、これらスポーツ雑誌というメディアが戦後社会の社会においてどのような意味を持っていたのかについて検討されることはなかった。

本論文は、ベースボール・マガジン社の雑誌資料や関連文献を掘り起し、同社の変遷やその誌面の変容過程を歴史社会的に跡付けることで、「なぜ、テレビや新聞を通して試合結果を知るだけでは飽き足らず、あえて事後的に雑誌で読んだのか」「そこには、テレビや新聞とは異なる、どのようなスポーツ雑誌独自のメディアとしての機能があったのか」について考察している。

同社の雑誌や関連資料を通覧して明らかになったことは、スポーツ雑誌と「教養」の結びつきである（ただしここでの「教養」とは、スポーツ雑誌の内容が実際に知的だったかどうかではなく、スポーツ雑誌を取り巻く人々が「知的さ」を見出そうとする認識の次元にある）。もちろん全ての読者が「教養」を求めて読んでいたわけではなく、「遊び」や「気晴らし」としてスポーツ雑誌を手にとる人々もいただろう。だが、戦後初期のスポーツ雑誌の誌面上には、「教養」や「高尚さ」を語る編集者や読者の声が少なからず存在していたのである。

ベースボール・マガジン社の雑誌は、戦後初期においては読者を知的な意味で指導する「啓蒙」志向を掲げていた。こうした編集方針は、読者からもまたスポーツ雑誌でありながら総合雑誌のような「高尚な本」とであると支持を受け、読者欄にも「高い教養を備えたファン」の議論の場としての期待が寄せられていた。

さらに現在のスポーツ出版社としての姿からは想像できないが、1960年代には小田実ら当時の著名な文化人を擁した論壇誌や、ソ連の情報誌を発刊するなど、社会・文化・芸術に関係する出版事業を展開した。では、なぜスポーツ雑誌上では「教養」が語られ、スポーツ出版社であるはずのベースボール・マガジン社が論壇誌を出すに至ったのか。そして、こうした雑誌文化は、いかなる社会背景のもと、衰退し、消滅したのか。これらの問題について

時系列的に検討を行うことによって、本稿は現代社会におけるスポーツとメディアの関係性を問い直している。

③章構成

本稿は以下のような章構成となっている。

序章 スポーツ雑誌と「教養」はなぜ結びついたのか

1. 問いの設定
2. 先行研究との差異
3. 分析視点と研究方法
4. 構成

第Ⅰ部 野球雑誌における啓蒙志向の盛衰

第一章 女性ファン誌から国民体育誌へ——戦時期における指導的スポーツ雑誌の成立

1. 早慶戦に沸くファン雑誌
2. 指導するスポーツ雑誌
3. 国民体育誌の戦死

第二章 インテリ気分を満たす野球雑誌——占領期における啓蒙志向の受容

1. アメリカを語る「権威」の発見
2. アメリカ野球を語る社会的エリート
3. 修養主義の下で説かれるアメリカニズム
4. 啓蒙志向の内面化

第三章 啓蒙志向の後景化——高度成長期における変容

1. 「見る雑誌」への転換と平凡文化との近接
2. 啓蒙志向と娯楽志向の軋轢
3. 読み易い週刊誌と国民的娯楽 59

第Ⅱ部 総合出版への派生

第四章 スポーツ出版王国への拡大——1950年代における啓蒙志向の模索

1. 野球からの飛翔
2. 総合スポーツ出版社の成立
3. オリンピックへの期待

第五章 マイナースポーツ誌の屈折——東京オリンピック前後における読者共同体の文化

1. 「知的なスポーツ」としての強調
2. 啓蒙メディアとしてのサッカー雑誌
3. 基軸メディアとしてのサッカー雑誌
4. 「読むスポーツ」とメディアとしての雑誌

第六章 一流出版社への憧れと頓挫——1960年代での社会・文化・芸術領域への派生

1. 趣味の指導

2.一般分野へのスピノフ

3.啓蒙志向の蹉跌

終章 教養主義的スポーツ雑誌の時代と終焉

④各章の要約

各章の概要については以下の通りである。

第1部において、野球雑誌における啓蒙志向の盛衰を戦時から戦後の社会状況を踏まえながら跡付けた。具体的にまず第1章では、終戦時における『ベースボール・マガジン』創刊の前史として、ベースボール・マガジン社の創設者である池田恒雄が編集長として携わった戦時期の『野球界』の変容を検証している。出版史では『野球界』が戦時期、時局に応じて誌名改題を「余儀なくされた」とするエピソードがしばしば語られてきた。一方で日中戦争が勃発する1937年、折しも池田が編集長に就いた当時の『野球界』は、意外にも女性読者の存在が強調されるファン誌であった。では、ファン誌としての性格は、戦時社会の進展とともにどのように変容していったのか。当時の出版バブルや「国防国家体制」の理念、また野球や相撲などの大衆スポーツの社会的な位置づけなどに着目しながら、総力戦体制下でのスポーツ雑誌の変容プロセスを解明した。

続く第2章では、1946年に創刊された『ベースボール・マガジン』を取り上げながら、占領期における野球雑誌の展開を整理・検討した。『ベースボール・マガジン』は、終戦直後の野球雑誌創刊ブームのなかで、「啓蒙」志向を掲げた。スポーツ記者以外の論者として、精神科医で東大教授でもあった内村祐之のような知識人を積極的に起用し、読者もまたこれを支持した。今日ではスポーツ雑誌の主要論客として大学教授がスポーツ論を披瀝する状況などあまり想像できないが、なぜ当時の『ベースボール・マガジン』は野球雑誌でありながら誌面に東大教授を登場させたのか。『ベースボール・マガジン』において啓蒙志向が選り取られ、読者からも支持された背景を、「ベースボール＝アメリカ＝デモクラシー」という占領期特有の野球言説の展開などから考察した。

第3章でも引き続き、『ベースボール・マガジン』を対象に、高度成長期における野球雑誌の変遷を分析している。1950年代、『ベースボール・マガジン』はそれまでの啓蒙志向としての「読む雑誌」から、「見る雑誌」への方針転換を図った。その方針転換は、単に一雑誌の変化に留まらず、背後にはスポーツ新聞、テレビの登場といったメディア環境の再編成とともに、野球の社会的な位置づけの変化など、当時の歴史社会的な文脈が存在した。こうした「読む雑誌」から「見る雑誌」への転換は、50年代末の週刊誌ブームにおける『週刊ベースボール』の創刊として帰結した。この『ベースボール・マガジン』の方針転換に対して、啓蒙志向を支持していた読者はどのように反応したのか。『ベースボール・マガジン』の「見る雑誌」化、さらに『週刊ベースボール』の創刊に至るプロセスを当時のメディア環境や社会状況の下で検討した。

そのうえで、第2部では、野球雑誌での啓蒙志向が、ベースボール・マガジン社刊行の他

の雑誌へと派生していく過程を検証した。第4章では、野球雑誌運営が軌道に乗る1950年代、ベースボール・マガジン社が野球以外の種目を扱った専門誌を創刊していった様子に着目する。その名の通り野球雑誌社を標榜したベースボール・マガジン社が、なぜ相撲、陸上、プロレスなど相次いで専門競技誌を刊行したのか。各雑誌において啓蒙志向はどのように展開されたのか（あるいはされなかったのか）、それとの関連で各スポーツにはどのようなイメージが付与されたのか。1950年代におけるベースボール・マガジン社の他競技専門誌創刊の動きを追った。

そのようなベースボール・マガジン社の動向をふまえながら、第5章では東京オリンピック前後に刊行されたマイナースポーツ誌の社会的機能について、より具体的に考察を行った。野球や相撲などに比べて、テレビや新聞などであまり取り上げられないことのないマイナースポーツは雑誌上でどのように論じられ、それを愛好するファンは雑誌をどのように受容したのか。1965年に創刊された『サッカーマガジン』を中心に、読者のみならず協会関係者なども含めたマイナースポーツ愛好者が、雑誌という媒体に仮託した期待やコンプレックスを明らかにした。

そして第6章では、ベースボール・マガジン社および姉妹会社である恒文社が、1960年代に展開していた社会・文化系雑誌の出版を扱った。ベースボール・マガジン社が「スポーツ出版王国」としての地位を確かなものにしていく1960年代、一方でベースボール・マガジン社の創設者にして社長であった池田恒雄は恒文社を設立し、当時論壇誌や男性向け週刊誌、ソ連の情報誌の翻訳版を創刊するとともに、東欧系の文学・芸術に関する全集も刊行した。なぜ池田は、スポーツ雑誌の刊行だけではなく社会・文化に関する雑誌・書籍の出版事業にも乗り出したのか。スポーツと社会一般への関心がいかに接続するのかを問うために、ベースボール・マガジン社のスポーツ雑誌から社会・文化系出版への派生の力学を明らかにした。

終章では、ベースボール・マガジン社の展開を俯瞰したうえで、現代のスポーツ雑誌のあり様とそれを取り巻くメディア状況にも触れながら、啓蒙志向に支えられてきた戦後のスポーツ雑誌文化の可能性と限界について考察した。

⑤まとめ

ベースボール・マガジン社において啓蒙志向が選り取られた背景には、主幹・池田恒雄の学生時代における教養体験が大きく関わっていた。同郷の英文学者に憧れ、英語教育を志望していた池田は、高度成長期において娯楽性の強い野球週刊誌が成功しても、啓蒙志向を手放さずそれを発揮できる場を求め、スポーツ以外の文化や芸術に関する出版事業を展開していったのである。

重要な点は、戦後初期まで啓蒙志向を支え、積極的に受容しようとする読者が存在していたことにある。そこには、社会的な大衆教養主義の潮流がうかがえる。それはいわば、スポーツ雑誌を通して「知」に触れようとする、背伸びの規範であり、高等教育における教養主

義の動きともいっくらか重なるものであった。具体的には「民主主義」や「近代社会」を説くアメリカ野球論などのように、野球というスポーツを題材にしながら社会的な理念を語り読む態度が誌面上では共有されていた。裏を返せば、そのことは、戦後のひところまでは、教養主義の価値規範がスポーツの語りを後押ししていたことがうかがえる。

こうした規範は、読者共同体として編集者と読者のコミュニケーションの場としての雑誌ゆえに共有されたものであった。読者投稿欄などを設けている雑誌は、同じ関心を持つ者どうしの「想像の共同体」を生み出す機能を有する。それを考えれば、ベースボール・マガジン社の雑誌は、スポーツを語りながら自分たちの「教養」を確認し、スポーツをめぐるアイデンティティを確認し合うメディアであった。それは、読者の対象がマスに開かれた幅広い新聞や、反対に個人に閉じた書籍ではなく、特定の関心を抱く読者に対して編集者がコミュニケーションを図るといふ雑誌の形式ゆえに共有可能であったといえよう。

スポーツと教養の接合は、1960年代にもなると、テレビやスポーツ新聞の普及（に伴う速報性の優位）や消費文化の浸透、そして何より（高等教育のインフレ化に伴う）教養主義の没落などが相俟って、徐々に成立が困難になっていった。

啓蒙志向としてのスポーツ雑誌出版には、スポーツだけに興味を閉じず、社会に埋め込まれたスポーツの意味を問う視座があり、それは今日のスポーツとメディアの関係を問ううえでも示唆に富むものである。個別種目の技術という限られた領域に特化するわけでもなく、かといって、スポーツを個人のドラマチックな物語としてある種、心理主義的に受容するのでもなく、そこから公的な社会のあり方や「知的なもの」を論じようとする営みがあったことは、ともすれば自明視されがちな現代のスポーツの語りを相対化し、それがどのように創られてきたのかについて、示唆を与えるものである。

⑥ 主な引用文献・参考文献

<引用・参考文献>

赤澤史郎「戦時下の相撲界——笠置山とその時代」『立命館大学人文科学研究紀要』第75号、2000年、85-159頁。

赤澤史郎・北河賢三編『文化とファシズム——戦時期日本における文化の光芒』日本経済評論社、1993年。

浅岡邦雄「大橋進一——「博文館王国」を築いた出版人」土屋礼子編『近代日本メディア人物誌——創始者・経営者編』ミネルヴァ書房、2009年、129-135頁。

阿部潔『スポーツの魅惑とメディアの誘惑——身体／国家のカルチュラル・スタディーズ』世界思想社、2008年。

荒川章二『全集日本の歴史第16巻 豊かさへの渴望』小学館、2009年。

有山輝雄『甲子園野球と日本人——メディアのつくったイベント』吉川弘文館、1997年。

有山輝雄「戦後甲子園野球大会の「復活」」津金澤聰廣編『戦後日本のメディア・イベント-1945-1960年』世界思想社、2002年、23-45頁。

池井優「日本における野球雑誌の消長（1）——創刊号刊行の背景と運命——」『ベースボールロジー』第5号、2004年、110-116頁。

池井優「日本における野球雑誌の消長（2）——創刊号刊行の背景と運命——」『ベースボールロジー』第6号、2005年、179-187頁。

池田雅雄編『相撲百年の歴史』講談社、1970年。
石井仁志「データが語る占領④スポーツ雑誌の世界」山本武利編『占領期雑誌資料大系—大衆文化編IV』岩波書店、2009年、1-7頁。
石坂友司「学歴エリートとの誕生とスポーツ—帝国大学ボート部の歴史社会学的研究から—」『スポーツ社会学研究』第10号、2002年、60-71頁。
石田あゆ『ミッチー・ブーム』文春新書、2006年。
伊東明「日本における体育・スポーツ雑誌の歴史」『上智体育』第2号、1969年、1-76頁。
内村祐之『鑑三・野球・精神医学』日本経済新聞社、1973年。
内海和雄『アマチュアリズム論——差別なきスポーツ理念の探求へ』創文企画、2007年。
内海和雄『戦後スポーツ体制の確立』不味堂、1993年。
内海和雄『プロ・スポーツ論——スポーツ文化の開拓者』創文企画、2004年。
瓜生吉則「〈少年—マンガ雑誌〉という文化」井上俊編『現代文化を学ぶ人のために（全訂新版）』世界思想社、2014年、147-162頁。
瓜生吉則「読者共同体の想像／創造——あるいは、「ぼくらのマンガ」の起源について」北田暁大・野上元・水溜真由美編『カルチュラル・ポリティクス 1960/70』せりか書房、2005年、114-134頁。
江國滋「伯楽登場⑩池田恒雄——“野球浪漫派”40年の本懐」『噂』1972年6月号、130-133頁。
江藤文夫『見る雑誌する雑誌』平凡出版、1966年。
大澤聡『批評メディア論——戦間期日本の論壇と文壇』岩波書店、2015年。
大橋進一「運動雑誌の編集」『雑誌年鑑 1939年版』日本読書新聞社、1939年、18-19頁。
岡井崇之「“ナチュラル” ボディーを手に入れる——総合格闘技ファンの身体・コミュニケーション」東園子・岡井崇之・小林義寛・玉川博章・辻泉・名藤多香子『それぞれのファン研究』風塵社、2007年、155-202頁。
岡崎満義「世の中変わればスポーツ誌も変わる」『総合ジャーナリズム研究』1980年春季号、52-56頁。
岡野俊一郎『雲を抜けて、太陽へ——世界へ飛躍する日本サッカーとともに』東京新聞出版部、2009年。
岡野俊一郎『サッカーのすすめ』講談社、1968年。
菊幸一『「近代プロ・スポーツ」の歴史社会学—日本プロ野球の成立を中心に—』不味堂出版、1993年。
工藤美代子『それにつけても今朝の骨肉』筑摩書房、2006年。
黒田勇編『メディアスポーツへの招待』ミネルヴァ書房、2012年。
権学俊『国民体育大会の研究——ナショナリズムとスポーツイベント』青木書店、2006年。
財団法人日本サッカー協会 75年史編集委員会編『財団法人日本サッカー協会 75年史』ベースボール・マガジン社、1996年。
坂上康博『権力装置としてのスポーツ——帝国日本の国家戦略』講談社、1998年。
坂上康博『スポーツと政治（日本史リブレット）』山川出版社、2001年。
坂上康博『につぼん野球の系譜学』青弓社、2001年。
阪本博志『『平凡』の時代——1950年代の大衆娯楽雑誌と若者たち』昭和堂、2008年。
佐藤彰宣「戦後日本の雑誌メディアにおけるサッカー言説とその受容——「読むスポーツ」の規範と教養主義への近接」『日本研究』第25号、2016年、133-153頁。
佐藤彰宣「戦闘機」への執着——ミリタリー・ファンの成立と戦記雑誌の変容」福間良明・山口誠編『「知覧」の誕生—特攻の記憶はいかに創られてきたのか』柏書房、2016年、285-322頁。

- 佐藤彰宣「野球雑誌をめぐる啓蒙と娯楽の拮抗——戦後初期における『ベースボール・マガジン』の変容」『ソシオロジ』第186号、2016年、43-61頁。
- 佐藤卓己『『キング』の時代——国民大衆雑誌の公共性』岩波書店、2002年。
- 佐藤卓己『言論統制——情報官・鈴木庫三と教育の国防国家』中公新書、2005年。
- 佐藤卓己『テレビ的教養——億総博知化への系譜』NTT出版、2008年。
- 佐藤卓己『『図書』のメディア史——「教養主義」の広報戦略』岩波書店、2015年。
- 佐藤卓己『物語 岩波書店百年史2——「教養」の時代』岩波書店、2013年。
- 塩澤実信『出版社大全』論創社、2003年。
- 清水論『甲子園野球のアルケオロジー——スポーツの「物語」・メディア・身体文化』新評論、2012年。
- JDFA (ジャパン・ダイヤモンド・フットボール・アソシエーション) 編『「ダイヤモンドサッカー」の時代』エクスマレッジ、2008年。
- 鈴木敏夫『出版——好不況下 興亡の一世紀』出版ニュース社、1970年。
- 関春南『戦後日本のスポーツ政策——その構造と展開』大修館書店、1997年。
- 藪田碩哉「余暇」渡辺潤編『レジャー・スタディーズ』世界思想社、2015年、12-26頁。
- 高嶋航『帝国日本とスポーツ』塙書房、2012年。
- 高岡裕之「観光・厚生・旅行——ファシズム期のツーリズム」赤澤史郎・北河賢三編『文化とファシズム』日本経済評論社、1993年、9-52頁。
- 竹内洋『革新幻想の戦後史』中央公論新社、2011年。
- 竹内洋『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』中公新書、2003年。
- 竹内洋『メディアと知識人——清水幾太郎の覇権と忘却』中央公論新社、2012年。
- 田中東子『メディア文化とジェンダーの政治学—第三波フェミニズムの視点から』世界思想社、2012年。
- 谷川建司「占領期の対日スポーツ政策——ベースボールとコカ・コーラを巡って」『Intelligence』第3号、2003年、30-41頁。
- 土屋礼子「創刊期のスポーツ紙と野球イベント」津金澤聰廣編『戦後日本のメディア・イベント——1945-1960年』世界思想社、2002年、47-70頁。
- 筒井清忠『日本型「教養」の運命——歴史社会学的考察』岩波現代文庫、2009年。
- 鶴見俊輔『大衆芸術』河出新書、1954年。
- 飛田穂洲『飛田穂洲選集第6巻—随筆と追想』飛田穂洲選集刊行会・ベースボール・マガジン社、1960年。
- 長崎励朗『「つながり」の戦後文化誌——労音、そして宝塚、万博』河出書房新社、2013年。
- 長崎励朗『『ロッキング・オン』——音楽に託した「自分語り」の盛衰』佐藤卓己編『青年と雑誌の黄金時代——若者はなぜそれを読んでいたのか』岩波書店、2015年、209-237頁。
- 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部、1997年。
- 中村哲也『学生野球憲章とは何か——自治から見る日本野球史』青弓社、2010年。
- 中村哲也「戦後日本における学生野球の制度とその理念——飛田穂洲と関連して」『スポーツ史研究』第18号、2005年、17-28頁。
- 日刊スポーツ新聞社編『日刊スポーツ30年史—1946-1976』日刊スポーツ新聞社、1978年。
- 日本体育学会編纂『日本スポーツ百年の歩み』ベースボール・マガジン社、1967年。
- 根津朝彦『戦後『中央公論』と「風流無譚」事件——「論壇」・編集者の思想史』日本経済評論社、2013年。
- 野津謙『野津謙の世界』学藝書林、1979年。
- 橋本政晴「メディアスポーツ研究の経緯」橋本純一編『現代メディアスポーツ論』世界思想社、2002年、25-47頁。

- 波多野勝『日米野球の架け橋—鈴木惣太郎の人生と正力松太郎』芙蓉書房、2013年。
 福島寿男「大正期におけるサッカーの中学校への普及とその日本サッカー史への影響」
 『体育史研究』第28号、2011年、45-54頁。
- 福岡良明『『葦』『人生手帖』——勤労青年が渴望した教養と人生雑誌』佐藤卓己編『青年
 と雑誌の黄金時代——若者はなぜそれを読んでいたのか』岩波書店、2015年、37-81
 頁。
- ベースボール・マガジン社編『志——ベースボール・マガジン社創立70周年』ベースボ
 ール・マガジン社、2016年（非売品）。
- 山口誠「聞くスポーツ」の離陸」吉見俊哉・土屋礼子編『大衆文化とメディア』ミネル
 ヴァ書房、2010年、3-19頁。
- 山口誠『ニッポンの海外旅行』ちくま新書、2010年。
- 山口誠『『メディアの野球』の歴史に見る可能性と課題』黒田勇編『メディアスポーツへの
 招待』ミネルヴァ書房、2012年、107-136頁。
- 山野井健五「活字プロレス」という装置」小田亮・亀井好恵『プロレスファンという装置』
 青弓社、2005年、27-50頁。
- 吉田則昭・岡田章子編『雑誌メディアの文化史——変貌する戦後パラダイム』森話社、2012
 年。
- 吉見俊哉『親米と反米——戦後日本の政治的無意識』岩波新書、2007年。
- 吉見俊哉「ポスト戦争としてのオリンピック——1964年東京大会を再考する」『マス・コミ
 ュニケーション研究』第86号、2015年、19-37頁。
- Anderson, Benedict, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of
 Nationalism*, Verso, 1983（白石隆・白石さや訳『定本 想像の共同体——ナショナリ
 ズムの起源と流行』書籍工房早山、2007年）。
- Berger, Peter and Luckmann, Thomas, *The Social Construction of Reality: A Treatise in
 the Sociology of Knowledge*, Doubleday, 1966（山口節郎訳『現実の社会的構成——
 知識社会学論考』新曜社、2003年）。
- Bourdieu, Pierre, *Homo academicus*, Les Éditions de Minuit, 1984（石崎晴己・東松秀
 雄訳『ホモ・アカデミクス』藤原書店、1997年）。
- Caillois, Roger, *Les Jeux et les Hommes*, Gallimard, 1967（多田道太郎・塚崎幹夫訳
 『遊びと人間』講談社学術文庫、1990年）。
- Chartier, Roger, *l'Ordre des livres*, Aix-en-Provence, 1992（長谷川輝夫訳『書物の秩序』
 ちくま学芸文庫、1996年）。
- Elias, Norbert and Dunning, Eric, *Quest for Excitement: Sport and Leisure in the
 Civilizing Process*, Basil Blackwell, 1986（大平章訳『スポーツと文明化——興奮の
 探究』法政大学出版局、2010年）。
- Fink, J.S. and Kenix, L.J. “An imperceptible difference: visual and textual
 constructions of femininity in *Sports Illustrated* and *Sports Illustrated for
 Women*”, *Mass Communication & Society* 5(3), 2002, pp.317-339.
- Huizinga, Johan, *Rowohlt deutsche Enzyklopadie 21*, Rowohlt Verlag, 1956（高橋英夫訳
 『ホモ・ルーデンス』中公文庫、1973年）。
- Jonetta D. Weber and Robert M. Carini, “Where are the female athletes in *Sports
 Illustrated*? A content analysis of covers (2000–2011)”, *International Review for the
 Sociology of Sport* 48(2), 2013, pp.196-203.
- Kennedy, Eileen and Hills, Laura, *Sport, Media and Society*, Bloomsbury Academic, 2009.
- Lumpkin, Angela and Williams, Linda, “An Analysis of *Sports Illustrated* Feature
 Articles, 1954–1987”, *Sociology of Sport Journal* 8(1), 1991, pp.16-32.
- MacCambridge, Michael, *The Franchise: A History of Sports Illustrated Magazine*,
 Hyperion Pres, 1997.

McLuhan, Marshall, *Understanding Media: The Extensions of Man*, McGraw-Hill, 1964 (栗原裕・河本仲聖訳『メディア論——人間の拡張の諸相』みすず書房、1987年) .

Mills, Wright, *Sociological Imagination*, Oxford University Press, 1959 (鈴木広訳『社会学的想像力』紀伊國屋書店、1985年) .